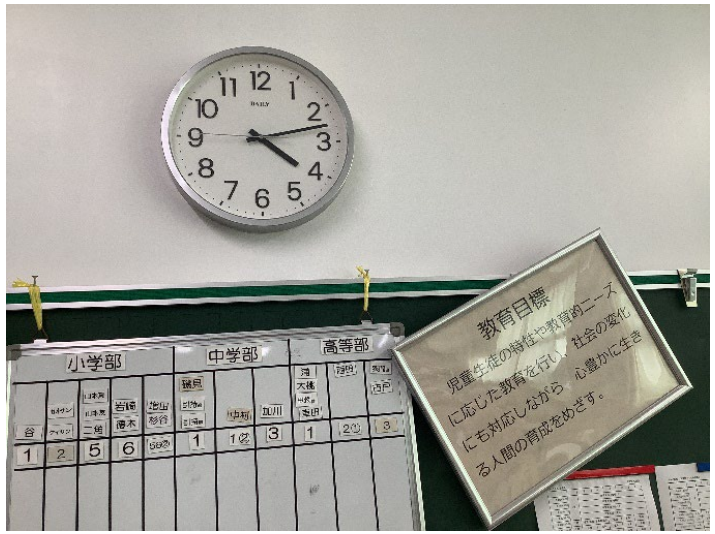
能登半島地震が起きてから
これまでの学校現場



全日本特別支援教育研究連盟

金沢市･能美市特別支援教育アドバイザー
佐伯　英明

- 地震発生時　私は金沢市の自宅

- スクールカウンセラーとして緊急派遣
  1/31　能都町立松波小中学校
  2/15.16　能登町立宇出津小学校

- ４月からスクールカウンセラーとして
  能登町立鵜川小学校、能登町立小木小学校

今回の資料は

・かつて同僚だった方で、現在能登地区の学校に勤務している教員からの情報

・実際の自分の体験

をもとに作成

石川県立七尾特別支援学校長　川井久也先生

石川県立七尾特別支援学校　輪島分校教頭

土佐智美先生

石川県立七尾特別支援学校(本校)

校長は1/2に学校へ

・校地の一部の地盤が崩れ、食堂や厨房、その2階にある
　小体育館などいくつかの建物が使えない状況
・上水道はとまり、排水管も壊れる(トイレが使えない)
・プールが破損して水が抜けている

・安否確認は2日間でほぼできた。
　最後に確認できたのは1/8で、完全孤立集落の子どもだった。

・排水管の修理に時間がかかる
・1/18より上水道がでる(飲用可能は一月末から)
・1/26に学校再開　半数以上の子どもが登校
　調理室で調理した簡易給食を三日に1回出す
　給食のない日は家庭から弁当持参
・4月からは同様の調理法で二日に１回簡易給食を提供
　給食のない日は非常食(缶詰、パン、おにぎりなど)
・6月からは隣接する町の給食センターから供給を受ける

・学習活動は、場所の制約があるものの教師の工夫で
　何とか実施可能だった

・勤務している教職員の半数が被災
特別休暇等で勤務をやりくりして、自分自身の
災害復旧にあたる
・遠方からの通勤者は、道路が寸断
交通渋滞により通勤時間が
大幅に増加(普段の約3倍)
・水が出ないために、職員が水を
運搬(持ち寄る)
毎日、近くの水が出るところへ水くみに行く

教職員の疲労は大きい

・災害備蓄品として
　非常食や水を学校に保管していた。

・飲料用の水は、早くに学校に届いた。
・備蓄していた非常食は、給食を始めた後、
　自宅から弁当を持って来られない子等に
　食べさせた。

水や食料の備蓄は必須

石川県立七尾特別支援学校（輪島分校）

近くに住む職員が1/3に学校へ

- 学校は地域の避難所になっていた。校舎内に避難してきた地域の人たちがあふれる。
- 避難所として使うため、校内の使える場所が限定される。
- 学校で子供たちが活動できるようにするために、多くの作業が必要

・災害備蓄品はなく、防災リュックを準備していた。
避難してきた地域の人が一部利用した。

・放課後等児童ディサービスが、施設や職員の被災により
利用できない状態。
→全国児童発達支援協議会の支援で校内で居場所作り

・通信系統がダウンして、児童生徒の安否確認が困難
孤立地域、通信環境の整わない地域、二次避難所への移動

災害が起こったときの保護者との通信手段の確保

緊急派遣スクールカウンセラーとして

派遣された小中学校は大きく被災

・学校でもあり避難所、自衛隊の設営地などでもあった。
・使える教室はギリギリ、体育は児童玄関ホールで。
・給食は炊き出しのおかずにレトルトご飯と缶詰。

・子供たちは比較的元気そうに見える
　「友達と会えるのはうれしい」とのこと。
・教員は全員が被災、校長は地震直後から泊まり込み

職員を支えるための面談

学校は子供たちの生活の中心

子供たちの生活を支えると言う視点からは
学校再開はまず取り組むべきこと

子供たちの学校での生活を支える備えとして
水と食料に加え、簡易トイレなども十分に

教師達も被災している。学校の再開には教師の支援が重要。
スクールカウンセラーの派遣だけでなく、授業を
行うことができる教師のチームを派遣することが大切！